

国立音楽大学附属中学校入学試験問題

令和四年二月一日

国語

※解答はすべて解答用紙に記入すること。

一、次の①～⑩の――線について、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 体を反らす。 ⑥ 万全な体調で入試にノゾむ。
- ② 負荷がかかる。 ⑦ 果物を器にモる。
- ③ 気持ちを奮い立たせる。 ⑧ 台風へのタイサクが必要だ。
- ④ 仏様に花を供える。 ⑨ 難民をキュウサイする。
- ⑤ 身の潔白を証明する。 ⑩ ナイカク総理大臣。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

コミュニケーションの秘訣は「沿いつつずらす」ことにつきる。これは私が標語化して、^{※1}キャッチフレーズのように使ってきた言葉だ。人と対話する時、相手に沿った話をしないと乗ってこない。a 沿っているだけでは話は発展しない。沿うことを前提とした上で、角度を付けて少しずらしていくのが私が経験的に得たコミュニケーションのコツである。

この経験の背景には身体の技法の訓練がある。b 武道ではいきなり相手を倒すこともあるが、まずは相手の動きに沿い、その動きを利用して^{※2}間合いをとりながら身体をずらして技を決める。相撲の上手投げや下手投げも、相手の動きをまず自分の体に吸収して沿っておくと、2人の体が1つになる瞬間がある。そこからまた自分の体の方向性をずらしていくと技が決まりやすい。

2人の方向性が一致しエネルギーが1つになった時、そのままであれば2人は一体となって動きは起きない。だが、あえて相手が本来持っていない方向へずらしを入れると、非常におもしろい効果が出るのである。

① 言葉のやり取りも同じだ。私は身体次元におけるコミュニケーションを研究テーマにしてきたので、対話も身体を^{※3}基盤に考えている。相手とコミュニケーションをとるには、まず身体の次元で寄り沿って話するのが基本だというのが私の考えである。

対話において、相手に「沿う」とは、身体レベルで言うと「うなづく」に当たる。うなづきがしっかりできていると、沿ってもらっていると感るので話す側が勇気づけられる。若い人は簡単にはうなづかないが、社会人になるとうなづく人が格段に増える。知らない人や友だち以外の人とうまく関係を保つていくためには、うなづくことが大事だと学習してきたからだ。

重要な仕事や大切な付き合いでは、うなづく回数が増える。また田舎の方が、都会の人よりうなづく回数が多い。講演会をやるとはつきり違いが出る。普段の対話でもかなり深くうなづくので、こちらは心温まる気がして話がしやすい。世代的に言うと、テレビやゲームが出る以前に育ったの方が^{※3}レスポンスが大きい。身体レベルで応答することによって、心が通い合う感覚を共有できる。

しかし、うなずくという身体レベルでの沿う技を意識的に練習する場合は少ない。本来は応答する柔らかい身体ができていて、うなずきが自然に生まれるのだが、^②冷え切った身体では自然にうなずくことができない。c生活の中で意識的にうなずきを繰り返すことで、身体の他の部分も応答する身体へと変えていくしかない。

大学では時々うなずく練習をさせている。自分の呼吸や相手の呼吸に合わせてうなずくと間が取りやすい。相手の話が一区切りして相手が息をつくところでこちらもうなずくなど、呼吸をするたびに顔を下げて間を入れると、うなずく技が習慣化しやすい。

これを言語レベルでいうとあいづちに当たる。「なるほど」とか「そうですね」とか「はあ」とか「ほう」とかあいづちを入れると、ずいぶん話しやすくなる。あいづちはうなずくのと同じ効果がある。

相手が途中で気分を害してしまうと話がきけなくなってしまいが、取りあえずあいづちを打っておくことで、本当は相手の話に同意していなくても相手の話を引き出して聞くことができる。これが「質問力」の前提になる作業である。

質問はクリアな言葉で行なわなければならないが、身体レベルで沿う構えがないと、質問が素っ気なくなってしまう。

^③うなずくか^④あいづちを打つ、あるいはあいづちに近いが相手の言葉を^⑤オウム返しに繰り返す技もある。これは場を流して次の言葉を引き出すのに④的である。あまり⑤的にやるとわざとらしいが、相手の言葉を確認するように繰り返して言ってみると、相手は話を続けやすいものだ。

ただし語尾を上げた疑問形にしてはいけない。あくまでも語尾を上げずに繰り返す。いわばオウム返し⑥の技だ。相手の言葉を反復して繰り返しても、新しい意味は何も生み出さないが、対話上手な人でもけっこうこの技を使っている。

次の段階の沿う技には「⑦言い換え」がある。相手の言った言葉を自分の言葉で言い換える技だ。意味は変わっていないが、聞き手が同じ内容を違う言葉で言い換えることで、内容がきちんと消化されていることが相手に伝わるわけだ。

「言い換え」は話の理解度を試す上で非常によい方法である。違う言葉で言い換えさせたり、自分の言葉で言い換えるトレーニングは効果的だ。同じ言葉を反復するのはただの丸暗記だが、自分の言葉で言い換えることができれば、その内容が※4咀嚼そしやぐされて自分の物になっていると相手に示すことができる。対話が無駄だになっていないことが相手にメッセージとして伝わるので、あいづちやオウム返しよりワンランク上の沿う技といえる。

さらに高度な沿う技は「引っぱってくる」技だ。相手が少し前に言った言葉をもう一度、今の文脈に持ち出すという技である。使う人がわりと少ない高度なテクニックだが、使ってみると非常に効果がある。

私は時々やるのだが、相手の話の中にキーワードをまず見つける。そして相手の口から発せられた言葉を自分も使うと、相手は大変好感を覚えるのである。

その際、直前に言われた言葉を使うと◎になってしまいが、20〜30分前に言った言葉やその人が他で言った言葉を覚えておいて引用すると「いやあ、君はよくわかっているねえ」と評価される。当人が言った言葉だから「わかっている」のは当然である。しかも自分の言葉だから、相手は喜んで話を聞く。非常に効果的な技である。

(齋藤孝『質問力』より)

※1 キャッチフレーズ……人の注意を引くわかりやすい宣伝の言葉

※2 間合い……相手との距離

※3 レスポンス……応答のこと

※4 咀嚼……よく噛むこと

問一 に入る言葉として最もふさわしいものを次のア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア なぜなら イ たとえば ウ だから エ しかし オ また

問二 —— 線① 「言葉のやり取りも同じだ」とありますが、どのような点で言葉のやり取りも武道も同じだと言っていますか。本文より適切な言葉を左記の文の空欄に合うように、七字で抜き出しなさい。

言葉のやり取りも武道も という点で同じ。

問三 —— 線② 「冷え切った身体」とは、対話においてどのような身体の状態のことですか。本文の言葉を用いてわかりやすく説明しなさい。

問四 —— 線③ 「うなづく」・④ 「あいづち」・⑤ 「オウム返し」とはどのようなことですか。それぞれ本文の言葉を用いて十五字以内で答えなさい。

問五 ・ に入る語として最もふさわしい語を本文よりそれぞれ二字で抜き出して答えなさい。

問六 —— 線⑥ 「語尾を上げた疑問形にはいけない」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 理解していないように相手に思われてしまうから。
イ 見下しているように相手に思われてしまうから。
ウ 反対の考えを持っているように相手に思われてしまうから。
エ 早く次の話題に移りたいと相手に思われてしまうから。

問七 —— 線⑦ 「言い換え」はどのような点でよいと筆者は述べていますか。本文の言葉を用いて、五十字以内で答えなさい。

問八 に入る語として最もふさわしい語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア うなづく イ あいづち ウ オウム返し エ 言い換え

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

複雑な家庭の事情を抱えた千絵を、かわいそうだから仲良くしてあげるようにと遠子は母親に言われた。その考えに違和感を覚える遠子は、同情していると思われたくないのであえて千絵と距離を置いていたが、真っ直ぐで飾らない性格の千絵に少しずつ心を許すようになり、距離が縮まる。そんなある日、遠子は、化石に強く興味を持つ千絵に付き合い、ナウマン象の化石が出たという現場に行くことになった。

「化石が見たいって？ あかん、あかん。なんや、珍しい骨が、ようけ出るかもしれんて明日あたり、偉い先生がきなさるんじや。それに、地滑りの危険もある。子どもが、入ったりできるもんか」

※¹札の側で、缶ジュースを飲んでいたおじさんは、ハエを追うように手を振った。

「おじちゃん、うちら、やっとこ山越えてきたんです。化石の出た場所だけでもちよこつと見せて。なっ」

千絵が手を合わせて、拝まねをする。

「山越えたんか？ そりや難儀じやったな」

「難儀、難儀。そやから。なっ、頼みます」

「だめじや」

あっさり断られた。^①千絵の肩がみるみる萎んでいくようだ。遠子は、真正面からおじさんの顔を睨んでしまった。

「おいおい。そんな怖い顔しんさんな。わしも、難しゅうは言いとうないけどな、ほんま、足場が悪いんで危険なんじや。それに素人さんにつつつかれると困るらしいし……わりいけど、我慢してや」

千絵が泣きだすのではないか。遠子は、心配だった。

けれど、千絵は泣かなかった。小さなため息を一つもらっただけだった。

「すまんけどな、わしには、どうもしてやれんが」

③ おじさんが、髪の毛をぼりぼりと掻く。

④ 軽くおじぎをして、千絵が歩きだす。

意外だった。

※²こんなに簡単に諦めてしまえることのために、山を越えてきたのだろうか。

※³右足のアキレス腱が微かに疼いた。

諦めたらだめなんだ。諦めて、従ってしまったら、どんどん惨めになっていく。

「伊岡さん、そんなに簡単に諦めていいわけ」

千絵の背中に声をかける。自分でも、どきつとするほどきつい調子だった。

千絵は立ち止まり、顔だけ振り向き、また歩きだした。

「ちよつと、伊岡さん」

駆け寄って右腕を掴む。

「あ痛。そんなに力入れてもたんといて」

「けど、けどな、せつかくここまできたのに。なんのために、山を越えてきたわけ？」

「あつ、そうやなあ。北川さんは、わざわざ付いてきてくれたんや」

「ばかと叫びたかった。その叫びをなんとか呑み込んだ。喉がこくつとくぐもった音を立てた。」

「付いてきてあげたわけじゃないよ。そんなんじや、ないよ。けど、伊岡さんがこんなに簡単に諦めるなら、こないほうがよかった」

千絵の腕が強く引かれた。

「諦めたりしてへんよ。勝手に決めつけんといて。ああ、痛い。手が折れるかと思うた」

「けど、けど……」

遠子は、口ごもる。

「おーい、頼むから、ケンカなんかするなや」

振り向くと、見張りのおじさんが大きく手を振っている。

千絵が、遠子の肩を押した。

「さっ、お弁当にしよう。お腹すいて、死にそうや」

「うちな、別に、諦めたわけやないで」

お弁当を広げた時、千絵が呟いた。

斜面にわずかに残った木の下だった。

「えっ、だったらどうするの？あのおじさんの隙をみてロープの中に忍び込む？」

「もう、北川さん、マンガみたいなこと言わんとして。そんなこと、うまくいくわけないやろ」

千絵は笑い、おにぎりにかぶりついた。

「うん……おいしい。あの、うちな、素人さんにつつかれたら困るって言われた時、ああそうだなって思うたんや。瀬戸内海の海底ならともかく、こんな山からナウマン象が発見されるなんて、すごい珍しいことやろ」

どのくらい珍しいのか、よくわからない。

「うちには、よう、わからんけど」

「うん。すごく珍しいんや。そしたら、やっぱりちゃんと調査せなあかんやろ。大切なナウマン象の化石やもの、だいに掘り出してほしいやん。前に、お父ちゃんに聞いたけど、珍しい化石が出たと聞いて、愛好家っていうの、化石が好きなのがぎょうさん集まって、せっかくの発掘場所がめっちゃめっちゃになったこと、あつたんやて。そんなこと急に思い出して、簡単に見せてもらえんかて、しやあないかなて思うて」

千絵の言うことは理解できた。けれど、素直に頷けない。

「伊岡さんの言うてること正しいかもしれんけど、あんなに一生懸命山を越えて、だめですって言われて、何にもしないで帰って、

一日、無駄にして」

「無駄やなかったよ」

千絵は大きな声をだした。遠子は、息を呑み込んだ。

「うちには、無駄やなかったよ。北川さんとあの山越えて、ここにこれて、よかったと思うてる。絶対、無駄なんかやなかった」

遠子の目の前を羽虫が過ぎった。透明なはねが、一瞬、小さく鮮やかに輝いた。目を伏せる。

⑦ 無駄なんて言葉を簡単に使ってしまったことが、悔やまれた。

「それにな北川さん、うち、ほんまに化石のこと諦めたわけやないで」

千絵が、指についたごはん粒をなめる。

「あのな、うち、大学に行きたいんや」

「大学に？」

「うん、ちゃんと考古学だとか地質学だとかいうの勉強して、発掘調査に加われるような専門家になりたいんや」

「けど、フタバズキリュウを発見した鈴木さんって高校生だったんじやろ。大学なんて関係ないんとかう？」

「うん、でも化石の復元作業なんかもやってみたいし、やっぱり専門家になりたい。ちゃんと勉強してみたいんや。けどな、大学は難しいし、今からいろいろ考えとかんとあかんわ」

「受験のことなら、まだまだ先じやろ。伊岡さん、頭悪くないもの。だいじょうぶじやない」

千絵は、ううんと頭を振った。

「勉強のことばかりやのうてな……お父ちゃんなんか、絶対あてにできんやろ。いろいろやり方考えんと、大学行くの難しいんや」

⑧ 顔が火照る。いいかげんに口にしたことが恥ずかしかった。口の中に、サンドイッチを押し込む。

マヨネーズを入れすぎた卵がパンから食み出して、地面に落ちた。

「北川さんのサンドイッチ、力いっぱい卵がはさんであるんやな。まっ、うちのおにぎりもそうやけど。はは、梅干し、二つも入れてきた」

不恰好な大きなおにぎりだった。

お弁当ぐらい、二人分ちゃんと作ってあげるといふ新子を断って、六時前に起きてサンドイッチを作った。よかったと思った。自分で作ってよかった。

(あさのあつこ『あかね色の風』より)

※1 札……立入禁止の立て札のこと

※2 難儀……苦勞をすること

※3 右足のアキレス腱……陸上部に所属していた遠子は以前アキレス腱の怪我をしていた

※4 ナウマン象……氷河期に生息していた象の仲間

※5 ぎょうさん……たくさん

※6 考古学……遺跡や遺物などから古い時代の生活や文化を研究する学問

※7 お父ちゃん……現在体を壊して入院している

※8 新子……遠子の母親

問一 ― 線① 「千絵の肩がみるみる萎んでいく」とありますが、左記の文はその際の千絵の気持ちを表したものです。
□内の指示にしたがって、文を完成させなさい。

ア(八字)

イ(三字)

□を見にはるばる □をしてきたが、あっさり立ち入りを断られてしまった、
千絵の □(五字以上十字以内) 気持ち。

問二 ― 線② 「素人さんにつつつかれると困る」とありますが、困る理由を本文の言葉を用いて、具体的に説明しなさい。

問三 ― 線③ 「軽くおじぎをして、千絵が歩き出す」とありますが、入ることをすぐに諦められた理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア これ以上おじさんと話をしても、状況は変わらず無駄だと思ったから。

イ おじさんの言っていることは、正しくてもっともなことだと思ったから。

ウ 諦めよくしおらしい姿を見せ、おじさんの考えを変えさせようと思ったから。

エ 時間をおいて作戦を練り直し、またおじさんのところへ出直そうと思ったから。

問四 ― 線④ 「意外だった」とありますが、遠子はなぜ千絵の行動を意外と感じたのですか。その理由を答えなさい。

問五 ― 線⑤ 「マンガみたいなこと」という比喻を千絵が用いているのはなぜですか。その理由を答えなさい。

問六 ― 線⑥ 「息を呑み込んだ」とありますが、その理由を答えなさい。

問七 ― 線⑦ 「無駄なんて言葉を簡単に使ってしまったことが、悔やまれた」とありますが、なぜ悔やまれたのですか。その理由を答えなさい。

問八 ― 線⑧ 「いいかげんに口にしたこと」の内容をわかりやすく説明しなさい。

問九 ― 線⑨ 「自分で作ってきてよかった」とありますが、その理由として、最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 同じ歳の千絵が自分でお弁当を作ったのに、自分だけ母親に作ってもらったのでは恥ずかしいから。

イ 自分で作ったことで、母親を早くから起こして疲れさせなくてすんで、安心することができたから。

ウ 自分でお弁当を作ったことで、同じく自分でおにぎりを作ってきた千絵と一体感が感じられたから。

エ お弁当を母親に頼むと千絵の好むおにぎりにされ、大好きなサンドイッチが食べられなかったから。